

1 検討に当たり参考とした視点

(1) これまでの外部有識者からの主な意見

(R4有識者懇談会・R5専門家懇談会・R6基本構想検討委員会)

①基本理念につながる視点（ソフト）

- 山形県の歴史や文化、自然を保存、継承することにより、県民のアイデンティティを育む。
- 「山形県らしさ」を特徴として追加すれば、県立博物館の良さが際立つ。
- 国内外の訪問客に山形を知ってもらうスタートラインとなる。
- 山形の自然、文化から何を選んで何を収蔵していくかを考え、未来に継承していく。
- 総合博物館としてあらゆる分野が一緒になって統合的な分野を生み出し、新たな価値を創出する。
- 県博が地域の博物館や地域の研究団体をつなぐネットワークの核となる。
- 地域文化を損失のリスクから守る文化財の防災拠点となる。

②施設整備につながる視点（ハード）

- 施設は山形という規模感でどんなことができるか、山形という土地に合ったものかということを考える必要がある。
- 県民が日常的に使える公園のような、くつろぎのあるリビングのような博物館がよい。
- 山形らしさを考えた場合、建物もコンクリートの冷たい感じではなく、木造のやわらかなイメージも検討の一つになる。
- 立地は交通の便が良く、駐車場が隣接し、だれでも利用しやすいインクルーシブな施設がよい。
- 収蔵機能の拡充は最優先課題。将来の収蔵スペースの不足への対応も含め、面積的にも余裕のある収蔵庫の検討が必要。
- 他機関所有の重要な文化財の鑑賞の機会を生むため、必要な措置が講じられている公開承認施設とすべき。
- カフェやミュージアムショップを併設し、展示を終わった後も楽しめるようにすれば人を集めやすい。

(2) 中学生との意見交換

(庄内地域の中学校)

- 庄内の展示はなかった。あまり記憶に残る展示はない。
- 自然の豊かさや食べ物が美味しいことが山形の長所。さらに、県民がそれを大事にしていることを伝えたらどうか。
- 本を読むのではない、「五感を使って理解できる場所」がよい。
- まず県立博物館が今持っている力を発揮することが重要ではないか。

(村山地域の中学校)

- ネットでは分からないもの、実際に触れたり、体験できるものがない。思い出に残る。行きたくなる。
- 子どもに訪れてほしいなら、親子で行ける、親が子どもを連れて行きたくなる施設。

(3) 教育関係者との意見交換

(県教育センター 指導主事)

- 子どもたちが山形の良さに気づき、地域へ関心を持ったり参加したりするきっかけとなる博物館になってほしい。
- 展示の量よりも質が重要。「博物館にいたら『学び』になる」と教員も連れていきたいとなる。

(各特別支援学校 校外学習等担当教員)

- バリアフリーはそこまで進んでいないところもある。まず基本の設備をしっかり考えてほしい。
- 盛岡市の「手で見る博物館」は全国の盲学校の修学旅行先の候補。小規模でも配慮がしっかりしていると、希少なので大変注目される。
- 最新技術より「筆談どうぞ」や「困ったことはありませんか」の声掛けがあるだけで受け止め方は全く違う。
- 展示物に触れることは、盲学校生以外にも非常に重要。心に残る。
- 子ども達が実際に手に取って触れる展示がほしい。特に児童生徒それぞれに目線の高さや手の届く範囲が異なることへ配慮があるといい。
- 聴覚障がいでは、補聴機器の性能が進化しており、音源から補聴機器を通じて聞取りができる。少しの工夫で大違いの体験になる。

1 検討に当たり参考とした視点

(3) 他県の先進博物館関係者との意見交換

(九州地方の博物館①)

- まずもって、自らの収蔵品をしっかりと保存し、しっかりと活用する。このことが基本である。

(九州地方の博物館②)

- インクルーシブ対応について、インバウンド向け展示の説明書き（キャプション）の多言語対応はスマホアプリで容易にでき既に珍しくない。障がい者対応は、学芸員が手話を習ったりしているが、いまだ手探りの状況。

(九州地方の博物館③)

- 香辛料の匂いあてクイズなど子ども達が触れる展示物をなるべく設置しているが、障がい者の利用を想定した展示というわけではない。

(4) 大学生からの意見

山形大学「2024博物館実習」他館見学レポート（テーマ：新山形県立博物館が参考とすべきこと）について、佐藤委員より情報提供いただいたものから引用

- 資料を並べただけの展示は、学びを得るまでのプロセスがなく、「資料を見た」だけで終わる。例えば、本物の甲冑と同じ重さの甲冑を着用するなど、五感を使って体験できる展示があれば利用者の理解につながる。
- ヤマガタダイカイギュウや縄文の女神の触れるレプリカを展示し、実物と同じ質感や重さを体験してもらうことで学びにつなげる。
- 子どもたちに興味を持ってもらうには、館内のチェックポイントでクイズに回答するような自ら学ぶことに資するものが必要。
- オンライン上で資料が閲覧可能になれば、拡大縮小など実物よりも鑑賞の自由度があがり、（関心が高まることで）博物館への来館につながる。
- 博物館で働く人々が使いやすい、管理しやすい博物館であることが重要。建物のデザインを優先し、収蔵スペースが狭まるようなことは避けるべき。

(5) 山形県立博物館学芸員との意見交換

- 山形県の“4地域をつなぐ接着剤”になり得るものは最上川。総合博物館として自然と人文の両方を総合するものとしてふさわしい象徴的な存在。山形の持つ地域的な特徴や強みとして打ち出してはどうか。
- 新博物館では、「過去から現在、未来に向けて、変化に対応しながら『山形らしさ』と向き合い、それを伝え続ける」ことを目指していきたい。
- 県民が参加して新博物館の展示をつくるような仕掛けがあれば、再び博物館を訪れるきっかけとなり、愛着の醸成につながる。
- 「ハロウィンナイトミュージアム(R6.10.26)」では2時間弱で800人以上の来場があった。博物館の活動を理解してもらうためには、博物館ならではの普段できない体験（バックヤードツアー、学芸員体験講座等）の機会創出が重要。
- 博物館資料の収集・保存は博物館活動の根幹であり、山形県の魅力発信や来館者の満足度の向上を図る土台である。
- 地域に根差した博物館となるには、山形県の自然・歴史・文化についての研究を通じて、新たな価値を見出し続ける必要がある。

令和5年度県政アンケート調査

調査項目 山形での生活について
設 問 山形県が他県に誇れる良さはどのようなものがあると思いますか。（選択肢の中から複数選択可）
回 答 者 1,297人（県内在住の満18歳以上のもの）

回答上位 第1位「自然環境の良さ」 76.8%
第2位「優れた食文化」 48.9%
第3位「豊かな農林水産物」 47.4%

第4位「治安や風紀の良さ」 (46.3%)
第5位「優れた郷土文化」 (23.0%)

2 基本構想検討において重視するポイント

重視ポイント① 今の県博物館が持っている力をしっかりと発揮する

- 現在の7分野（収蔵約30万点）をしっかりと保存し、しっかりと活用する

重視ポイント② 県内全域の特徴や強み・山形の多様性を紹介する

- 県内全域の多様性と、共通する特徴（最上川・水の恵みなどの自然環境の豊かさ）を紹介する
- 食文化や農業（果樹園芸）を含む山形の強み、何がすごいかを示すことで、誇りと愛着を育む

重視ポイント③ 誰にとっても訪れやすい、楽しめる博物館とする

- インクルーシブ重視とともに、実際に触れる展示をはじめ、五感使って理解し、体験・体感できることを重視する

重視ポイント④ 本県の将来を担う子どもたちの学びに資する

- 「楽しく学べる」、「教員や親が連れていきたいくなる」博物館を目指し、博学連携を重視する

重視ポイント⑤ 機能性を踏まえたメリハリの効いた施設構成とする

- 学芸員等の働く者の使い勝手も踏まえた機能的な施設構成や適切な管理運営方法を検討

⇒ 上記の「重視するポイント」を土台に基本構想を検討